ボタンで描くアート作品（1994-2019 年）の記録

RECORDING OF ART WORKS DRAWN WITH BUTTONS 1994-2019.

戸矢崎　満雄　　芸術工学部アート・クラフト学科　教授

Mitsuo TOYAZAKI　　Department of Arts and Crafts, School of Arts and Design, Professor

要旨

1994 年から 2019 年までのボタンによる私の作品は、インスタレーションによるアートであり、ボタンとは衣服に着けるものである。

1983 年より私は、市販される同一の日常品を大量に使い、広い空間に展示した作品群で注目された。その後、環境問題を意識することから、人々が消費し廃棄するものを作品の素材として使うことを考える。1994 年には身近な不要品を大量に集め、初めて京都のギャラリーでボタン作品を発表した。

作品はボタンを集めることから始めた。先ず知人を訪ねることから、廃物業者に依頼する他に、広く「ボタンをください」と呼びかけることにより多くのボタンが集まる。収集したボタンは、色や素材に分けてガラス瓶に納める。次に、作品を設置する場所が重要であり、空間のもつ意味や時節などを捉えて、様々な色や形を描いて展示する。多くは床に並べる方法を用いるが、天井から吊り、空間に浮かす作品もある。

ここでは、ボタンのインスタレーションによる制作の意図や経緯などを主要な作品をもとに解説し報告とする。

Summary

My works of buttons from 1994 to 2019 are the art pieces by installation, and buttons are what you sew on your clothes.

Since 1983, I have been attracting attentions for the group of works that use a large amount of the same everyday items that are commercially available. After that, considering environmental issues, I will consider using what people consume and dispose as materials for my works. In 1994, I collected a large amount of unneeded items around us, and for the first time presented a button work at the gallery in Kyoto.

The works started by collecting buttons. At the first, calling out to acquaintances, requesting garbage dealers, call out widely "Please give me a button". So I could get enough buttons thanks to a lot of supports. The collected buttons are sorted by color and material, placed in glass bottles. Next, the place where the work is set up is important, and various colors and shapes will be displayed to capture the meaning of the space and time.Most of them use the method of arranging them on the floor, but there are also works that hang from the ceiling and float in the space.

This is a report that explains the intent and background of the production of the button installations based on the main works.

1. はじめに

この報告は、1994年から2019年までの26年間にわたるボタンによる私の主要な作品[注1)]を記録するもので、作品はインスタレーションによるアートであり、ボタンとは衣服に着けるものである。

1983年より、私は市販される同一の日常品を大量に使い、広い空間に展示した作品群で注目された。その後、環境問題を意識することから、人々が消費し廃棄するものを作品の素材として使うことを考える。1994年には、身近な不要品を大量に集め、初めて京都のギャラリーでボタンによる作品を発表した。

制作は1993年に不要のボタンを集めることから始めた。先ず知人に求めることから、廃物業者に依頼する他に、広く「ボタンをください」と呼びかけることにより多くのボタンが集まる。収集したボタンは、色や素材に分けてガラス瓶に納める。

次に、作品を設置する場所が重要であり、空間のもつ意味や時節などを捉えて、様々な色や形を描いて展示する。多くは床に並べる方法を用いるが、天井から吊り、空間に浮かす作品もある。

写真1　作品制作中『虹』、ギャラリーギャラリー（京都）

2. ボタン作品『白』、『黒』、『虹』

1994年3月、京都と東京を合わせて3つのギャラリーで個展を開催[注2)]した。京都と東京の2箇所の画廊は同じ中古シャツを使った展示である。

当時は京都のギャラリーギャラリーに3つの部屋があり、1部屋ごとにタイトル『白』、『黒』、『虹』のボタンによるインスタレーションを発表した。

1年以上かけて不要のボタンを集め分類する作業を進めていたが、私がイメージしていた密度に対し、全く数量が不足していた。当時は2万個以上を集めていて、作品として使うボタンはその一部である。集め始めて分かったのは、色では白が一番多いことと、次には黒と茶である。

そのことから、それぞれ白と黒のボタンのみの作品が最初であった。最初に制作したいと考えていたのは、カラフルなボタンをスペクトルに並べた『虹』である（写真1）。洋式では京都で最も古いビルの最上階にあるギャラリーの真っ白な空間を早くからイメージしていた。

写真2　作品『星条旗』、ノースダコタ州立美術館（U.S.A）

3. インスタレーション『星条旗』

同年の7月に、ノースダコタ州立美術館からの招待を受けて、現地制作の作品を2種展示した。ローレル J.ロイター美術館長が選考した日本的な作家の一人に選ばれ、美術館のエントランスに展示したインスタレーションが『星条旗』である（写真2）。赤と青と白のボタンを使い、アメリカ国旗を描いたものだ。もう1つの作品も既製の星条旗を繋いだ大きな野外作品[注3)]で、現地では大きな話題となった。

4. 震災を契機とした『A Shell』

1995年に私は神戸で震災を経験した。京都のギャラ

写真 3　作品『A Shell / 一つの貝』、トゥルネーの教会（ベルギー）

リーそわかから、「震災体験者を」という理由で依頼を受け、「記憶のかたち」と題する個展を開催した。ギャラリー会場は、以前に専門学校だったこともあり、地下から 2 階まで展示用の部屋が多数あった。

その中でも特に地下室が個性的な空間であり、4 種のボタンによるインスタレーション作品[注 4)] を発表した。その内の 1 点『A Shell / 一つの貝』は、貝ボタンだけを使い 1 つの貝を描いたものである（写真 3）。

その 10 年後に、ベルギーのトゥルネーという歴史ある街の芸術祭[注 5)] に招待され、使われていない教会を会場に選び、祭壇前に『A Shell / 一つの貝』を再現した。10 年の間に、貝ボタンは約 2 千から 8 千個に増えたので、作品の質も大きく変わったのは必然であった。

写真 4 作品制作中『たまたま水玉 2010』　撮影：笹田雅樹

5. 回数を重ねる『たまたま水玉』

1997 年に京都市美術館で開催された「思い出のあした」展に招待作家として出品した。美術館の建築空間は古いがしっかりしたもので、広い 1 室を 1 人で展示することになり、3 種類の作品を計画した。その 1 つが、空間を広く使ったインスタレーション『たまたま水玉』である（写真 4）。

ボタンを集め始めて 4 年が経過し、数を数えなくなるほどに集まってはいたものの、制作の結果で判ったのは確実に量不足であった。しかし、色分けしたボタンの数に合わせて大小の丸を描き、それを水玉模様のように配置するアイデアはボタン作品のコンセプトに合うものだ。

その後、同じタイトルに年号を変えて発表したのは、2000 年・広島市現代美術館、2002 年・渋川市美術館、2005 年・和敬塾本館、2010 年・岡山県立美術館と続くが、いずれも大きな作品である。また、それらの作品は日程的に個人での制作は困難なので、ボランティアなどを募集して複数人で行った。

私が作品として様々な素材を使うなかで、ボタン作品が突出して数多く長く継続してきたのは、ボタンが増え続けることによって作品の質が最新のものほど良くなってゆくからである。しかし、ただ多くのボタンがあったとしても、それを均一に並べる作業というのは、必ずしも誰もができることではない。[注 6)]

写真 5　明倫茶会会場　撮影：畠山崇

6. 明倫茶会でのインスタレーション

京都芸術センターでは、クリエイターたちが行うお茶会

を定期的に開催している。参加は有料で、一般の方々が申し込む。私に2001年の秋開催の依頼があり、日本茶ではなく中国茶会を行うこととなった。

会場となる旧明倫小学校大広間は、かなり立派な空間である。明倫茶会では、それまで中国茶を選んだ人は無いとのことで、決めた理由の 1 つは、たまたま友人に詳しい人がいたからだ。台湾から直輸入した[注7)] 最高級の茶葉を使い、茶器は台湾まで渡航し買い求め担いで持ち帰った。全体の演出として、写真家、陶芸家、彫刻家、テキスタイルデザイナーなどに協力を仰いだ。

そのなかで、私のボタンによるインスタレーションは二箇所ある。1つは丸い明り窓の棚にスペクトルに並べたもの。2つ目は、大広間半分のスペースに石庭の砂紋のように白いボタンを配置した（写真5）。

お茶会とは、ただ茶を楽しむものだが、アートやデザインで豊かに演出し、ボタンの役割は一期一会に花を添えるものとして効果的であったのではないか。それは、参加者アンケートの結果にも表れていた。

写真6 作品制作中『水の音』　撮影：矢野誠

7. 公開制作『水の音』

2004 年にアサヒビール大山崎山荘美術館が主催した「『通崎好み』通崎睦美選」展において、参加アーティストとなりボタン作品を制作した。地下には、安藤忠雄が設計したモネの部屋[注8)] があり、円弧の壁にモネの絵が複数展示されている。その前の空間を使いたいと私が希望した。

モネの絵の前に置くのだからモネの絵を数多く観ようと考え、私はパリに向かった。モネ以外にも印象派の色使いを調査研究して、並べるボタンを選んだ。印象派の絵画には色をドットで置く点描があり、ボタンで描くことと共通する。スペースは4m四方で、開放部分が小さく閉ざされているため、私は 1 人で制作することを決意し、結果として公開制作とした（写真6）。

制作は会期初めの10日間ほど会場に通い、実業家が建てた美しい建物の眺めの良いバルコニーのあるカフェで休息をとった。そこで、特別なビールを飲むのを楽しみに制作したことはなんと贅沢な体験だったろう。

タイトルの『水の音』は、有名な芭蕉の古池の俳句から引用した。フランス絵画と対峙するために、日本の伝統美から力を借りて、波紋を描きたいと考えたからである。

8. 京町屋の『干菓子』

祇園花見小路の町家を生かしたギャラリー楽空間　祇をん小西がある。2006 年 7 月の個展開催の依頼がオーナーよりあった。場所柄といい、空間といい申し分のないものだが、作品の 1 つとしてボタンでどのように描くかは悩んだ。ボタンのインスタレーションは、あまり具体的な形を描くのに適さない。

ちょうど祇園祭があり、観光客が大勢行き交う表の道に面して、「あじろが敷かれた部屋を生かす作品を」と考えた。配色の点からも伝統的な干菓子（7月）の3つの形を模した作品『干菓子』は、グリーンの「青楓」、水色の「波」、ピンクの「糸巻き」である（写真7）。

写真7 作品『干菓子』、楽空間 祇をん小西（京都）

9. 日本文化として『Passage of Time』

キュレーターとしてレスリー・ミラー教授が来日して訪問取材があり、2008 年にイギリスで開催される国際展「Cloth & Culture NOW」[注9)] に出品依頼があった。ボタンは「布」ではないが、布を留めるもので、色彩を使い柄を描くことはテキスタイルアートの 1 つである。

「文化」がテーマにあるので、日本の伝統文化としての文様を考えた。そして、楓の葉が季節によって色変わりする様を表そうと計画し、『Passage of Time』を現地で制作した（写真 8）。同じ楓の形を 4 葉使うので、大きな型紙を現地に持ち込み作業の効率化も計った。型紙を使うのは日本の古くからある伝統技術でもある。

美術館側から提案があり、安全性を考えて作品の設置台を 12cm の高さにした。しかし、会期中に子供が作品にダイブして、形が崩されることがあった。床にボタンを置くインスタレーションでは、常に作品に踏み込まれる危険などに対し配慮をしなければならない。

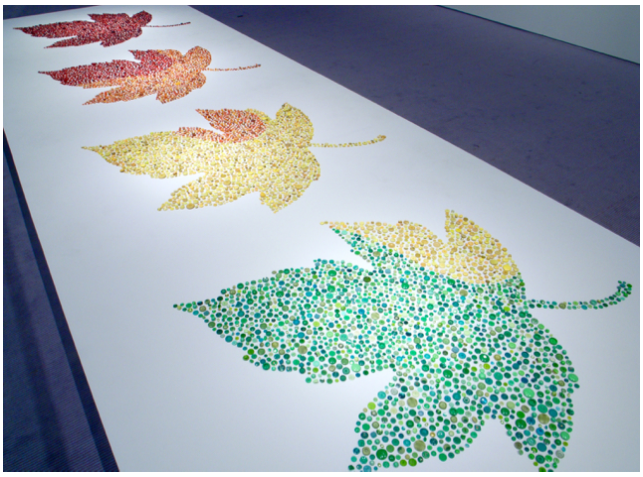

写真 8 作品『Passage of time』、イギリス

10. アートプロジェクト『銀の雨・金の環』

「神戸ビエンナーレ 2011」では、新たに企画された「高架下アートプロジェクト」の公募があった。地元の高架下という場所に関心があったのでチームをつくり応募した。書類審査で入選[注10)] が決まり、早くから会場も決まって準備を進めることができた。

会場は普段使われないし、住まいから遠くないので、長期間の作業が可能だった。チームとしては会場計画に建築家 1 名と大学のゼミ生と大学院生が制作作業を担当した。準備期間も制作時間も十分に与えられたこの作品で、銀ボタンを空中に浮かせるために、釣り用の無反射テグス（黒）を初めて使用した（写真 9）。

入選が決定した後、とても忘れ難いことが起こり、強く心が動かされた。東日本大震災は、私の神戸での震災体験とも重なった。「きら kira」が神戸ビエンナーレ 2011 のテーマであったこともあり、鮮やかな色彩を選び、復興への思いを込めた。

写真 9　作品『銀の雨・金の環』、撮影：矢野誠

11. 震災の記憶『薔薇と髑髏』

大震災への思いや、京都のギャラリーギャラリーを起点に始めたボタン作品へのオマージュとして、2013 年に同所で床を黒にして 1 つの光源で浮かび上がるドクロを描くことにした。ドクロは死を暗示するが、右目の穴から 1 輪のバラが咲く。赤いバラは再生を暗示する（写真 10）。

写真 10　作品『薔薇と髑髏』、撮影：矢野誠

ここで私の作品として初めて試みたのは、無人ギャラリーであることを生かし、1点から観て正確なかたちになるように並べることである。あるポイントから観るときに、正しい形が見える地上絵も各地に生まれているようだが、地上に描く絵では、視点によって形が歪んでしまう。写真はその 1 点から撮っている訳だが、別の角度から見た場合、形は大きく歪んでいる。

写真 11　作品『川の流れ』　撮影：油井和幸

12. 故郷の記憶『川の流れ』

2014 年に、長野県の小海町高原美術館からの依頼を受け、「記憶の地層」展のために「千曲川」をモチーフとして作品『川の流れ』を制作した（写真 11）。私が生まれた千曲市は川の中流域であり、小海町は上流域に位置し、私は高校卒業まで千曲川近くで過ごしている。

私は「千曲」が意味する「蛇行する」かたちを象徴的に描き、安藤忠雄が設計した円弧を描く長い空間を生かそうと、それまでにない長さの作品を計画した。美術館の作品は地元新聞などに大きく取り上げられ、ボタンで描くという見慣れない作品であったが、恵まれた自然環境と合わせて多くの来場者を迎えた。

13. 国際芸術祭参加『空飛ぶ赤いボタン』

「瀬戸内国際芸術祭 2016 沙弥島アートプロジェクト」[注 11] として、旧沙弥小中学校の 1 室で『空飛ぶ赤いボタン』を制作した（写真 12）。アートプロジェクトでは「赤」をテーマとしたので、海岸をイメージして床に散らばせた白いボタンと空中に赤いボタンをハート型に浮かせた。

写真 12 作品『空飛ぶ赤いボタン』　撮影：旦昌弘

準備期間中に、広く「赤いボタンをください！」と呼び掛けた。チラシを撒き、SNS で呼び掛け、地元新聞に取り上げてもらい、市役所などに募集用の箱を置いた。国際的に注目される芸術祭でもあるので、反響は予想を超えてあり、ボタンは海外からも届いた。

宙に浮くハート型は、空飛ぶ絨毯をイメージして生まれた。思いを届けるというストレートな意味のハートと、昔話に出てくる世界を自由に移動する絨毯である。開催期間中に気づいたことだが、多くの人が会場で写真を撮り、SNS などで発信していた。赤いボタンの作品は動かないが、情報となって世界を駆け巡った。

14. アートプロジェクト『千年の星空』

「瀬戸内国際芸術祭 2019」では、県内連携事業として「神戸芸術工科大学アートプロジェクト」[注 12] を瀬居島で行った。坂出市瀬居町竹浦の使われていない古民家の屋根裏部屋を使って作品『千年の星空』を制作した（写真 13）。

芸術祭で特に重視される「サイトスペシフィック」とは、その場所固有の作品をその作家特有の表現で創ることである。その古民家には、長年の生活が染み付く埃に塗れた空間と時代に取り残されたものたちがあった。

それらを住民の協力で片付け、掃除して傷んだ箇所を整

えて会場の準備とした。計画や制作準備も住民の協力で進め、1個ずつ貝ボタンに黒糸を通す作業は、多くのボランティアによって繰り返された。最も難しい天井からボタンを吊る作業は私1人が行った。

黄土色の壁を墨汁で黒く塗り、暗闇に変わった部屋に、約 2 千個の貝ボタンを浮かせた。星の色調に変化を与えるために、わずかにフィルターで色づけた弱い光をライト3個で照射した。急な階段で2階に登った初めは何も見えないが、慣れると静かに星が瞬き出す。

天然の貝殻は光をよく反射し、作品はほとんど夜空の星屑に見える。しかし、そこにどんな物語を思い描くかは観る人の想像力に任せたい。

写真 13 作品制作中『千年の星空』　撮影：旦昌弘

15. 岡山県立美術館での鑑賞者参加型作品

2019年に岡山県立美術館の企画展として「目の目 手の目 心の目 part2」が開催されたのは、2015年に開催された「part1」が好評で、続編が計画されたためである。「アートと遊び」をテーマとして、特に子供を対象にしていることもあり、思い切ってそれまでやっていない方法を試みることにした。

先ず触ってもらうこと、目を楽しませるためにゲーム感覚の作品2点を計画した。そして、ただ遊ぶだけでなく、古くからある「諺」を作品タイトルとすることで、先人の知恵を学んでもらうことも目的とした。

作品『塵も積もれば山となる』は、白いボタンを細い透明の滑り台から丸い池に転がして、それが積もって山になる作品である。2 つ目の『棒ほど願えば針ほど叶う』は、池の中央にあるハート型にくり抜いた台に向かって、赤いボタンを投げ入れ、ボタンが入ったら願いが叶うという占いになっている。

会期中は、子供を無料にするという美術館の配慮もあり、多くの親子が来館し、楽しみながらアートに触れた。特に、赤いボタンの投げ入れは大変な人気となり、主催者たちを大いに喜ばせた（写真 14）。

写真 14　白と赤の参加型作品、岡山県立美術館

16. おわりに

2020年になっても、「神戸芸術工科大学アートプロジェクト」として、使われない香川県坂出市の高松信用金庫旧坂出支店にある金庫室を使い、ボタンのインスタレーションを発表した。ここでも場所の特性を生かすことが重要であり、鑑賞者参加型作品を更に進めている。

急遽、そこに問題が起こったのは新型コロナウイルスの影響である。アート作品を通して、鑑賞者と直接に触れ合える作品コンセプトが揺るがされる事態となった。もちろん、対応策をとったものの展覧会の延期なども含め残念な点も多い現実がある。

「なぜボタンを？」と問われることがある。私は多種の日常品を素材にしたが、ボタンだけが例外的に多くなった。私の他のものと比べると、作品として売れたことはない。他にボタンを主に扱う美術家を見たこともない。美術家にとってはオリジナリティーこそ重要だが、私の生家が衣料品店だったことも理由の1つだろう。

不要のボタンを使った作品の特徴は、収集に長く時間がかかり、場所を得た時に初めて生かされる瞬間が訪れること。それを別のもので例えるならば、私の思い出に残る夜

空を彩る花火と似てはいないだろうか。

注
図版・写真に撮影者名の記載がないものは筆者作成。

1) 戸矢崎満雄作品集『Button Installations MITSUO TOYAZAKI』自費出版、2016年発行、1994年から2016年の主要なボタン作品16点の写真とボタン作品年表、他に2名による作家・作品解説を掲載。

2) 京都のギャラリーギャラリーはボタン作品、京都のギャラリー無有と東京のギャラリーNW ハウスではシャツシリーズを展示。

3) North Dakota Museum of Art で、1993年10月～翌年9月に、「Light and Shadow」展に延べ15人の日本人作家が招待を受けた。ボタン作品の他に、既成品のアメリカ国旗とイギリス国旗を連ねた2点の大型布(長さ6m)をワイヤーで大木間に吊り上げ野外展示した。

4) 赤いボタンを使った『流れる赤』、木製ボタンを使った『ウッド』、透明ボタンを使った『グラス』と、貝ボタンを使った『一つの貝』の4点。

5) 「5th International Textile Triennale Exhibition」は2005年7月にベルギーの歴史のある街トゥルネーで開催。日本人6名と世界各地からテキスタイルアーティストが招待された。

6) 2002年に渋川市美術館での制作で、写真撮影のため小学生にボタンを並べてもらったところ、大人と比べると等間隔で置くことが難しかった。また、一般からの希望者の中にも集中力が続かず作業に向かない人がいた。

7) 中国茶は大阪にある茶葉店清水一芳園の文山包種・東方美人・木柵鉄観音の3種を使用。また、店主の清水和正は、茶会の最初に中国茶について参加者に説明した。

8) 美術館は、実業家・加賀正太郎が昭和初期に英国風に建てたものを復元した山荘と、新たに隣接した地下に安藤忠雄設計の地中館がある。現在は、中央の四角い空間が変更され、円を2分する壁面となり常設の絵画が展示されている。

9) Sainsbury Centre for Visual Arts(ノーリッジ)で開催された。『Cloth & Culture NOW』（キュレーターLesley Millar 教授著）は University College for The Creative Arts より2008年に出版。

10) 応募者数51点から入選者は13点、完成後に奨励賞を受賞し、一般見学者の人気投票では1位。
戸矢崎満雄・藤山哲朗、「神戸ビエンナーレ 2011［高架下アートプロジェクト］作品‘銀の雨・金の環’」、『神戸芸術工科大学紀要芸術工学2012』、2012参照。

11) 戸矢崎満雄・藤山哲朗・かわいひろゆき・しりあがり寿・さくまはな・中山玲佳・市野元和、「アートプロジェクトによる地域密着型の教育実践とその効果/［瀬戸内国際芸術祭 2016 沙弥島アートプロジェクト］を通して」、『神戸芸術工科大学紀要芸術工学2016』、2016参照。

12) 神戸芸術工科大学の研究助成で2020年に出版、『神戸芸術工科大学アートプロジェクト2019』編集者：戸矢崎満雄、かわいひろゆき、藤山哲朗、中山玲佳、尹智博を参照。